



37 加藤友太郎

《青華玉蜀黍図花瓶》

一点

明治三十四年（一九〇二）

陶磁

径三二・〇、高四九・〇

明治三十三年（一九〇〇）に開催されたパリ万国博覧会は、わが国にアール・ヌーヴォー様式をもたらす契機となった。西洋では、アール・ヌーヴォーをはじめとする新様式の登場は、美術と工芸の融合という美術概念を大きく変容させる出来事であったが、わが国ではそれはまず凶案の問題として理解された。第五回内国博に出品された陶磁作品は、宮川香山、錦光山宗兵衛など、何人かの先鋭的な製陶家が一歩アール・ヌーヴォー様式を思わせる作品を出品した。加藤友太郎もそのなかの一人で、本作は第五回内国博の前年に開催された第一回全国窯業品共進会に出品され、一等賞金牌を受賞した。それまで主流であった凶案様式と異なる点では、花瓶の一面のみを窓枠にしてひとつの画面とするのではなく、花瓶全体をひとつの図柄が覆うような構成とし、余白はあくまでも余白のままとして残している点である。そのほかにも、クローズアップされた図様や、輪郭線の強調、釉下彩、濃淡を使いわけた染付、薄い浮彫など、新しさを感じさせる部分が多くみられる。加藤の先進性がよくあらわれた作品である。

加藤友太郎（一八五〇―一九一六）は瀬戸の出身で、東京で井上良斎のもとで修行し、ワグネルから西洋陶磁の技術を学んだ。明治十五年に友玉園を設立し、釉下彩を生かした優美な作品で高い評価を得た。第四回内国博では妙技三等賞、第五回は三等賞を受賞した。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

内国勸業博覧会 ― 明治美術の幕開け

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 57

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年四月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections